

同人誌（2017年10月号）

風 狂

風 狂 ！ の 会

詩

花咲く庭で	北岡 善寿
生々流転	長尾 雅樹
秋 夕	高 裕香
白雲はるか	出雲 筑三
その一発	神宮 清志
不平等の源泉	高村 昌憲
青 鬼	原 詩夏至
われらも拉致被害者	韓 喜徳
気になる雲	なべくら ますみ

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（二十三）	三浦 逸雄
--------------	-------

エッセイ

酔狂洋酒談義（二）	神宮 清志
-----------	-------

翻 訳

アラン『大戦の思い出』（五）	高村 昌憲 訳
----------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2017年9月号）

あの手になげぬ酔っ払いが
柄になく花に埋もれて
聖者の顔で棺に納まっている
悲しみも喜びも
苦しみの気配もない
すべてを断念した顔だ
引き摺って来た苦い悔恨や
金が仇の世の中と縁を切った
見たこともない真面目な顔だ
「馬鹿者！てめえはいったい
何のために生きているんだ」
生きていた時に吐いた
酔っ払いの決まり文句だが
難しくて答えようがなかった
「お前は何のために死んだのか」
こちらで今更言ってみても
何の意味もないのと同じだ
最後に仮面を脱げば仏ということか
気違い水を飲んだのはもう儚い夢で
これからは無限の沈黙を飲むだけのこと
お前は自分に別れを告げて
金色の柩の車に乗り
勿体ぶって門を出て行く
見送っているのはひそひそ声の
黒い葬列ではなくて
広い庭で雲の流れる空に高く立つ
風に薫る辛夷の花に隠れた
お前自身の亡魂なのだ

山川草木皆生命ありと
仙崖の夢告を朝夜に尋ね
流転滅滅の門流を
はるかな眼下に治めて
悠々自適の命運を神仙に潤す
遠大な眺望の天然自然から
桃源の裔が舟人に棹さし
漂泊の民人は人馬を引く
雲流れ霧迷う修羅人界から
山野の惰眠を破るものは誰か
清流集合して大河となる
満々として豊饒の輪廻を巡り
風雲の試練は俗界の塵埃を払う
威風堂々究極の救拔を求めて
天下る壮烈な生き残り作戦から
天上天下無明魔神の棲家となるか
はたまた法性真如の楽土となるかは知らず
唯に日々の安逸を祈り
とうとうと流れ下る人生流浪の旅を
溪谷の激流を転展して
峻烈の激甚を岩壁に刻む
人生の展望は茫洋として霞み
ゆるやかな水流に翻弄されながら
木の葉は沈み浮木は静かに漂よう
煩惱多き三悪未断の^{ともがら}輩たちよと
雷雲閃く修羅の闘浄現場から
生きるための闘いの映像空間が照写される
河口に辿り着いた一隻の小舟から
雄大な転生の秘話が語られる
水精の変身譚が天の怒りを鎮めるか
森羅万象生きとし生きるもの
生命ありと夢に諭されて
仙界の見聞を糺して人情の襞を覗く
無限に円環する大河の流転を垣間見る

慌ただしいせみの声が虫の声に
秋風になびいているその声は
なぜか、優しく憂いを帯びる。

お墓参りに行くと
供え花の菊に負けじと
コスモスの花が咲いていた。

今日は、月見のだんごを供えて
思い出深い亡き人と
心静かに会話をしよう。

今宵は、十五夜
大きな丸い丸い月なのだが
顔を見せてくれるのだろうか？

大きく輝く月の中のうさぎは
なぜか、統一祖国に見えるのは、
私だけなのであろうか？

おぼろげに見える月は
厚い雲に覆われて
今宵は、見えない。

さいきんの雲は荒っぽい
流れてもながれても雲は来る
しかも神出鬼没で情がない

海は厚い水層があるから乾固しない
しかし陸は蒸発する水分は限られ
畑土のひでりは広範囲になってゆく

忘れたのか！雲は水の微粒子だということを
気温がたった一℃あがるだけで
過集積になり空の濁流が生まれる

産業革命前までは一℃もあがらなかったが
今世紀末までには二℃あがるのは確定した
温暖化防止の努力をしないと三℃上昇する

人は二℃あがると体調を崩す
地球も汗かいて地温放熱を急いでいく
エアコン都市には集中豪雨が頻発するだろう

白雲は青空が見えてこそ美しい
地球は青かった
それはかつて若かった沈黙の臓器の色

突如まちかで起こる銃撃音
猛スピードで乗用車が走り去る
白い煙が澄み切った空に吸い込まれた
硝煙の匂いがしばらくたち込めていた

そこはトルコの首都アンカラに近いシルクロード
スーパーマーケットから出てきた途端この場面に遭遇した
周辺に居た人々はほとんど無表情であった
日常茶飯事といわんばかりに見えた

共に居た日本人には何事が起ったか分からない人も多かった
トルコの東部は危険地帯として
観光の対象からはずされている
アンカラもこんなことが普通に起こる処だった

硝煙の匂いは遠く戦争末期の日々を思い出させた
銃撃音も爆撃音も日常茶飯事だった
戦闘機が急降下してきて銃撃してくる
その音は鉄砲とは段違いに激しく重い

爆弾が落ちるときの音は二種類あった
ゴーっと鋭い音がしたら一キロくらい先に落ちる
ヒュルヒュルヒュルつときたら至近距離だ
次の瞬間空気と地面が裏返りその轟音はすさまじい

こんなことが連日繰り返された
澄み切った青空はトルコと同じだった
なにかは知らねど
そんな日々が近づいている予感がしてならぬ

競争を好んで利用する人は誰ですか？
スポーツで勝負する監督さんですね
競争で成果を出したい人は誰ですか？
売上げを伸ばしたい社長さんですね

選手や社員は死に物狂いで動き回り
疲れた心身で帰宅すれば無為が自然
勝利とか売上げが人生の全てになり
引退したり退職した途端に脱殻同然

監督も社長も組織に責任があるから
骨身を削る時もあるにはあったのだ
しかし瓦解するのは最後の時だから
その前に疲弊するのは選手と社員だ

教育者たちが競争を煽っているなら
直ちにその資格を剥奪して貰いたい
競争は不平等を生む源泉になるから
彼らが黙認し出すのは不公平な社会

軍隊には不平等が精力的に保持され
全ての不平等の源泉は戦場の軍隊だ
そこには特別待遇も不公平も導かれ
上官は命令で部下を殺してきたのだ

台風がもう行ってしまったから
庭先の蟋蟀が鳴くのではない
庭先の蟋蟀が鳴いているので
台風がもう行ってしまったことがわかるのだ
ゲーム「青鬼」の巨顔の青鬼が
大きな瞳でこちらを見つめながら
鉄格子をがたがた揺るとき
その眼差しが湛えているのは
憎しみでも破壊欲でも性欲でも
食欲ですらもなく
むしろ奇妙な昆虫を見つけた
孤独な少年の孤独な好奇心
（それとも愛？）
家を揺さぶる台風のそんな
がたがたした希求に怯えながら
やはり孤独なゲームの少年が
危険が去り
死に置き去りにされた
変にしらじらしい安堵の心で
庭先の蟋蟀を聴いている
青鬼よきとおまえはそのむかし
親友の赤鬼の踏み台に志願し 村を追われ
そのままだこかへ行方をくらました
お人よしのなれの果てなのだね
こんなところにいたのか
まだいたのか
そうして今度はどこへと去ったのだ
大きな瞳でこちらを見つめながら
鉄格子をがたがた揺すったおまえは
結局 こちらに入りたかったのか？
つまり牢屋の中へ？
風はやんだ
青鬼はもう行ってしまった
赤鬼は泣いた

そして少しずつ青鬼を忘れた
少年は泣かない
まだ身を丸めたまま
黙って蟋蟀を聴いている

※「青鬼」...インターネット上の無料ホラーゲーム。追って来る青鬼から逃れながら、謎を解き、館を脱出する。逃れ方には、走って振り切る、箆筒・牢・トイレに隠れる等、幾つかの方法がある。

待ち続けた四十年
幻の怪獣に連れ去られた少女
私達が生きてきた四十年でもある

一九七〇年代社会は経済の発展途上の中で
取り残された部類の人として苦しみもがいた時代である
そんな時期にあちこちで拉致された人達

怪獣が革命のいたずらで誘拐拉致事件
監視できずに情報収助力の衰えか
ワザと恐れたふりをして見過ごしたのか

怪獣を取り押さえられずにいる
八〇年代に怪獣の住拠を探し出し
八人が戻りましたが多くは逃げられずにいる

九〇年代バブルが弾けて経済的に困難に
怪獣は知らぬ存ぜぬでだんまり
今年は二〇一七年 事件より四十年もの間

世界の変化は激しくも怪獣の姿は変わらず
何をしているのか何を考えているのか分からずにいる
何の打つ手も残ってないのか年月は静かに過ぎて行く

この誘拐の不条理を解決出来ないでいる
本当に解決する方法が無いのか
解決の方法はあるがしないだけ

解決するためには自らも怪獣でないことを
証明しなければならない

大きな硝子の扉が開き
目の前に繰り広げられたのは
木々の歓迎
柳は枝先をさやさやと鳴らし
プラタナスは大きな手のように開げた葉を
私の肩先から 足元へと撫でてくれた

そして鳥たちの歓迎も
カササギは 木の上から
カッチ カッチと声を挙げ
道案内はぐぐもった声の鳩たち
晴れた空の片隅に見えたうすい黒雲
台風だろうか
飛行機の到着が少し遅れた人もいたようだが

これから先の数日 続いて欲しい晴天
集う
韓国 中国 と日本の詩人達
語り合った共通の話題は

《平和 環境 治癒》

世界の誰もが熱望しながら
なかなかかなえられない難しさ
今もあの国で
この国で繰り広げられている問題

休憩時間のわずかな間
通り過ぎた 一瞬のさわやかな雨
その向こうには気になる雲が
まだ 色濃くあったが
誰も話題としなかった共通の対応
この穏やかさを共有したい と

帰国の飛行機が遅れるのではないか

気にしていた雲の存在
何時の間に消えていた雲
私は誰にも邪魔されず
予定の時間には我が家の前に立っていた
深く輝く夜の空の下に

2017年9月14日から17日迄
韓国の平昌にて開催された「韓国詩人協会詩の祝祭」に招かれて



三浦 逸雄 「少年」15号（麻布 油彩）

死んでも放さなかったスロージン

日本バーテンダー協会では、酒を醸造酒、蒸留酒、混成酒の三種類に分類している。醸造酒というのはビール、シャンパン、ワイン、日本酒等、蒸留酒はウイスキー、ブランデー、ラム酒その他である。混成酒というのは果実酒・リキュールの類である。日本の家庭で造られる梅酒もそれに分類される。洋酒のリキュールというのはもう一つ馴染みが少ない。しかしヨーロッパ文化というものをこれほど表しているものもないかも知れない。もう少し親しんでもいいとかねてから思っている。しかしリキュールってなんだと問われると答えに窮する。その定義は曖昧で国によっても違う。調べてみると、EU諸国では「糖分が一リットル当たり百グラム以上含まれるアルコール飲料」と定義されている。これならすこぶる単純で分かりやすい。ハーブなどの薬草、果物のエキスを混ぜ合わせて甘い味をつけたアルコール飲料、と自分では解釈してきた。そのベースは蒸留酒が普通だけれど、それも国によって醸造酒でもいいとされ、日本はその一つである。

ヴェルモットという酒はほとんどの国ではワイン系と見られているが、日本では混成酒に分類される。ニガヨモギほかの草根木皮、香料を四〇種から八〇種も使い、これにブランデーを加えてアルコール分を二〇%くらいにしている。ドライとスイートがあり、ドライは食前にスイートは食後に飲むという決まりがある。いずれも胃健強壯の効能があるとされている。

ヴェルモットはイタリアとフランスが一級である。イタリアン・ヴェルモットあるいはフレンチ・ヴェルムトと呼ばれる。イタリアではチンザノ、フランスではノイリー・プラが名高い。中年の頃に食前食後に毎夜飲んだことがあり、口当たりもいいし、いかにもいい食事をしたという満足感が得られる。近頃この酒の瓶のラベルを見ると、ドライの瓶にはカクテル「マティーニ」の材料と書いてあり、スイートの瓶にはカクテル「マンハッタン」の材料と記されている。こんな説明は明らかに余計なことだ。イタリア・フランスのヴェルモットの醸造者が見たら怒るであろう。これほどに伝統のある酒に、何かを混ぜて飲むなどということは文化的な冒涇だと思っただけであろうか。ヴェルモット以外にもリキュールの多く、そしてラム酒にまでカクテルの材料としての説明書きがついている。困ったことだし、嘆かわしいと感ずるばかりである。このように主張しても「だってラベルにそう書いてあるではないか」とあっさり退けられてしまう。瓶の説明書きにはそれだけ権威があるし、わが同胞たちは権威に弱い。

スロージンというリキュールがある。英仏の山野に野生するスローという渋味と苦みのある梅の実に似たものから抽出された混成酒である。紅い色をしていて炭酸水で割り、甘みを付けるとスロージンフイズとなり、バーその他では人気がある。紳士たちが女性に勧めるカクテルの一つである。スロージンといえばなんといっても戦後の伝説的ストリッパーであったジプシー・ローズが愛飲したことで有名である。

アメリカ兵を父に日本女性を母に九州で生まれ、小学校から中学校にかけて成績優秀で五番以下に下がったことがなかった。しかし貧困と偏見が彼女をストリップの舞台に立たせる。棟方志功が神の肉体と称賛したその魅力的な容貌と肉体、文壇の粹人たちの多くを魅了してやまなかったジプシー・ローズは、楽屋では孤立しがちで、痛飲するようになる。とくにスロージンを好ん

で飲み、たちまちひとときも放せないほどの中毒となった。そして三二歳という若さで夭折してしまった。その生涯を「花火工場が爆発したような」と評した文学者が居た。その死んだときの写真が残されていて、うつ伏せに倒れている左手にはスロージンの瓶が握られている。この写真は旦那でありマネージャーだった正邦乙彦氏が撮ったもので、彼の演出だったといわれている。

リキュールいろいろ

アブサンというリキュールがある。ニガヨモギ・ハーブその他数十種の薬草を入れて造られている。薄い緑色をして、見るからに旨そうだ。「緑の魔酒」「緑の妖精」と呼ばれ多くの人を魅了してきた。ところがこれをいきなりストレートで飲むとひどい目に合う。アルコール度数が七〇度前後あり、九〇度近いものもある。この酒には飲み方があって、正式にそれを実行するにはなかなか手が混んでいる。カットグラスで出来た専用のグラスがあって、複雑に穴の開いたアブサンスプーンがある。このスプーンも凝ったデザインの工芸品である。このスプーンをグラスの上に渡して、そこへ角砂糖を乗せ、その上からアブサン用のウォータードリップを使って水を滴下する。やおらスプーンを角砂糖とともにグラスに入れてかき回して飲むという次第だ。あるいはスプーンに乗せた角砂糖をアブサンで湿らせて火を点じ、ミネラルウォーターで消火してアブサンスプーンでかき回して飲む。

こうした道具立てでじっくり味わうところに、得も言われぬ桃源郷があるのかもしれない。ただ水を混ぜて飲むのではあまりに味気ない。中ほどが丸く膨らんで上方が開いている専用のグラスに、薄緑色のアブサンを注ぐと、それだけで独特の雰囲気醸し出す。その上に工芸品のようなスプーンをかけ渡して、角砂糖を乗せる。そこにアブサンを注いで、部屋を暗くして火を点ずる。青白い火が妖しく燃え上がるといやでも幻想的な気分が盛り上がる。揺らめく青白い炎を見詰めてから、水を加えて消火しつつスプーンをグラスの中に入れてゆっくり混ぜていると、白く濁ってきて麻薬を試すような妖しさに吸い込まれる。この酒に使われる薬草の中に幻覚症状を引き起こしやすい作用があると聞く。甘美な背徳感に朦朧として、我を忘れて酔いの異次元に遊ぶのである。

アブサンは安価でもあって、フランスを中心にヨーロッパ諸国で造っていたから、多数の中毒者が出て、それに伴って犯罪も多発した。芸術家でアブサンの愛飲家も多く、中にはアブサン中毒で身を滅ぼした者も居た。詩人ポール・ヴェルレーヌ、画家のロートレック、ゴッホなどがよく知られている。二〇世紀初頭から長きにわたって製造販売が中止になったこともあった。「禁断の酒」「魔酒」と呼ばれるにふさわしいリキュールである。太宰治の『人間失格』の主人公が飲んでいたが、太宰自身は飲んだのだろうか。近頃日本で売られているアブサンは、五〇度前後の弱めのものが多いようだ。専用のグラスおよびスプーンなども入手可能である。ただしアルコール度数が五〇%では青白い炎は上がらず、赤い火に黒い煙が騒々しく、幻想的気分には程遠い。

コワントローというリキュールがある。これはオレンジの果皮から造られ、甘味濃く無色透明の高級リキュールである。キュラソー系であり、トリプルセックも同様である。いかにもフランスらしい粋な雰囲気、飲んだ瞬間から高級感が漂う。食後に飲むもので、お菓子の材料などにも使われている。このコワントローまたはベネディクティンドムを傍らに置いて、夜も更けゆく頃にほんの少し飲むというのが長年のささやかな贅沢だった。

ベネディクティンドムはイタリアの修道院で造られ、製法は秘密であり薬種が四〇種以上使われているとされている。薄い琥珀色をしていて四三度である。深みのある濃厚な味、得も言われぬ芳香と雰囲気がある。コワントローはいかにもフランスらしい粋なところが感じられるのに対し、ベネディクティンドムはどことなくローマ帝国の伝統を思い起こさせるようなところがある。ベネディクティンドムは略してドムと呼ばれることが多い。ドムとは祈りの言葉“Deo Optimo Maximo”の略で「最大最善の神へ」の意味だ。イタリアの寺院に行くと高僧の石碑が建っていて、その一番上に“D.O.M.”と記されているのを見掛ける。

もう一つ忘れてならないものに、フランスを代表する「リキュールの女王」と称される酒がある。「シャルトリューズ」がそれである。ブランデーをベースに砂糖および百三十種以上のハーブを加えて樽で熟成される。修道院で造られたので今でも製法は秘密とされる。緑色をした「ヴェール」は五五度と強い。黄色の「ジョーヌ」は蜂蜜の甘味をもったまろやかな味で四〇度である。ほかにもあるがこの二種が代表的である。一般家庭ではほとんど飲まれないが、バーとかクラブでは知られた高級リキュールである。トニックで割り、ライムを絞って飲むのが普通である。トニックというのはトニックウォーターの略で、炭酸水に薬草および柑橘類の皮の苦み成分を加え糖分を少し付けたものである。蒸留酒によく合うので多用される。シャルトリューズなどは強いのでトニックで割ると飲みやすい。ジントニック、コワントロートニックといろいろな飲み方がある。しかし食後に一オンスをストレートで飲むのが、通というものだろう。

いずれにしる中世のカトリックの修道院というところは不思議な世界である。先に記したシャンパンをはじめ、リキュールの高級酒の幾つかは修道院で発明されている。ヨーロッパ諸国が未曾有の高度成長したのは、黒人奴隷・銃・砂糖の三角貿易と植民地支配による収奪のおかげであり、その為にどれくらいのアジア・アフリカ・中南米の人々を不幸のどん底に投げ込んだか計り知れない。今なおこれらの人びとは争乱と貧困に苦しみ、多くの人が飢えに追われているのである。その建前はキリスト教の布教ということであった。その本家本元の修道院の奥において、聖職者たちがより旨い美酒造りに熱中していたとは、何をかいわんやである。

リキュールというのはあまりに数多い。アプリコットブランデー、チェリーブランデー、ペパーミント（薄荷から造られる。オランダではクレムドメント）、アドヴォカード（オランダの名産）他、挙げていたらきりが無い。オランダがリキュールの大国であるということは覚えておいていい。その多くは薬草、花、実から造られ、消化を助ける食後の酒として一オンスを飲むのが本来の飲み方である。しかしわが国ではそれらの多くがカクテルの材料に使われ、蒸留酒と混ぜて飲むものという認識しかないのが現状である。

以上のようなことをどこで学んだかといえば、それは水商売の世界においてだった。すでに書いたようにわたしは高校卒業と同時に水商売の世界に入り、四年半ほどその世界で暮らした。そこは色と慾の世界であり、女をめぐるカネが飛び交う世界である。しかし同時に洋酒を売る商売でもある。よって洋酒に関しては本職であって、わたしは正式に勉強したわけではないが、毎晩そのことについて聞きかじってきた。今でもシェーカーを振ることが出来るし、忘年会その他でご愛嬌にカクテルをつくったことが何度かあった。といってバーテンダーだったわけではなく、ボーイの素養として自然と身に付いたものである。ここで取り上げた洋酒は、すべて自身で飲んだものだけにした。よってロシアのウォッカ、サボテンから造られるテキーラ、中国の諸種の

酒を避けざるを得なかった。

日本の伝統的な酒といえば言うまでもなく「清酒」である。その清酒をなぜ日本人はもっと大切にしないのだろうか。本物の日本酒が減多に売られていないという現状を憂いていいはずだ。カリフォルニアに移住して三代目の日本人が米と麴で酒を造った。するとその旨いこと、日本で売っている瓶詰の酒など問題にならなかった。いったい今の日本人は何をやっているのかと呆れたという。わたしは国産大豆と米麴（または麦麴）と赤穂の塩田の塩を使ってみそを造ったことがある。このみそはどこで売っているみそよりも格段に旨かった。素人のほうが手抜きせずに本物だけを使って造るから、上等のものが出来るということだろう。一般人が酒を造るのは法律で禁じられているけれど、やれば似たような結果になると思う。戦前まではそうした本物の酒を売っていたのに、敗戦後は全くダメになってしまった。文化の、そして国の滅びとさえ嘆きたくなる。利潤追求という金科玉条がもたらした一つの結果なのだろうか。

清酒は醸造酒だけれど、コメの蒸留酒として焼酎とその一種である泡盛がある。しかしそれらに高級感がないのは残念だ。そこで提案する。米を醸してそれを蒸留し、何年か寝かせてじっくり熟成して、新たなコメの蒸留酒を造ってほしい。その場合ネーミングが重要であろう。洒落ていて、重みのある、それでいて皆に親しまれる名前はないものか。やがて世界中で愛飲されるようになって欲しいものだ。そうなるためには日本人自身がいい飲み手になることだ。いい飲み手がいい造り手を育てる。永きにわたって一流の文化を育んできた国にのみいい酒はある、という証明をして欲しいものだ。（完）

第四章

私は銃後に遠く戻らなければなりません。何故なら時間の唯一の糸が、思い出とそれと同じものが最もくっついた観念を取り上げるからです。私が現在求めているものでもあるからです。私たちは悲惨な生活をしていました。胃はねっとりした液体に漬けられた薔薇色の繊維質の肉を拒絶しました。三一軍団司令長官からの伝令たちが現れた時、私に大きな変化が突然にやって来ました。彼らは日中に、そして時々夜間に、通りの向こう側の屋根裏部屋にあった防衛担当区域で最も美しい監視所に順番に仕事を与えにやって来ました。これらの騎兵の下士官たちは競馬関係者たちです。富裕で贅沢な生活をしていて、卵や葡萄酒やコニャックの様な忘れられた品物を荷車の中に持って来ました。私はお金の使い道を再発見しました。私たちは借金を返しましたが、二つの椅子と一つのヴォルテール風の肘掛椅子を備えて、一人の会食者を結局は落ち着かせました。植民地人の砲兵であるランドリーは、これらの品物の主な職人でした。彼は褐色の肌をしていて陰険に笑いました。村の廃墟の中で彼は人々が望んだ品物を何でも見付けて来ました。彼の最初の商売は未だ熱い儘の砲弾の破片を新入りの若者たちに持って来ることでした。実際に熱くて手が火傷する程です。しかし、それはストーブの後ろで保存するものでした。近くで爆発がある度に彼は走って行き、そして戻って来ました。或る日、優雅な監視手たちの一人が森で捕らえられたと言われた若い猪たちのことを話していましたが、その一頭を手に入れるために何かを与えたいとつけ加えて言いました。ランドリーは言いました、「あなたは十フラン与えませんか」。〈市場〉での値が決められました。そして翌日、子供の猪が一頭荷車に乗せられました。部隊の配置に就いていた人々や農民や樵たちは、野生の猪の群に数人で包囲して、若い動物をどすんと落とす術を大変良く知っていました。恐るべき猪の雌も決して問題にしませんでした。その様にして参謀部の人は犬と同じ様に馴れた何頭もの若い猪たちと遊びました。私は、人間が実際に動物たちの王であることを分かり始めました。

私は森の人間たちに余り会いませんでした。しかし、彼らの中には友人たちもありましたし、樵の幸せな一日が思い出されます。私たちは一般的にホップを絡ませた支柱を、進入禁止の斜面へ夜間取りに行って燃やしましたが、柵の支柱とか大樽とか戸棚の破片とか、ついには略奪し得た物は全て同じ様に燃やしました。進んで賢明に振る舞っていたT大尉は、ホップを絡ませた支柱一本が二十フランの価値があり、私たちは畑荒らしをする者であり、終わりにしようとしていることを私に説明しました。「あなたは樹木から森林までを探しに行きます。前方には二輪の荷車があり、左方には監視所があります。それを偵察しに行ってください。あなたは二頭の馬を手に入れて、その夜には御者になり、翌日には樵になるでしょう」。彼は私を走らせて気に入っていましたが、彼は正しかったのです。探検が好きだったル・バルビュは、私と一緒にその二輪荷車を偵察しにやって来ました。私たちは用意されていたかの如く幾らかの砲弾を持っていました。しかし、私たち二人の班は良く命令されました。私は道を選びました。夜には馬車に乗りました。翌日は現地人を探しに行きました。彼らにラム酒の小ビンを見せながら、大変に良質のエリキシル剤の薬は樹木を伐るためのものである、と私は彼らに言いました。この種の冗談は軍隊のものです。しかし私はそれを古代風で殆どイソップの寓話だと感じています。奴隷制度は至る所に

貧弱な花々を生みます。その日の後で、その間は上官の声が一度も聞こえないのですが、私は材木で一杯になった荷馬車を護衛して道を進みました。そしてマンドル・オ・カトル・ツールを目指して、荷馬車と私は二つに分かれました。一方がもう一方を探しに行くことは問題でした。何故なら私は頑固者でもあるからです。私は幾つかの障害を通過します。馬たちの御者が気まぐれな様子を見せて抵抗には無防備そのものであることを、私は単に思い出しております。というのも私は未だ上等兵ではありませんでした。その後、一度ならず私が即興的に昔話を創ったのもその時のことです。「あゝ！ あなたはスープが冷めて、そしてこの戦争が大変退屈になると考えています。だが、それではアルザス＝ロレーヌ地方を誰が奪還したいと思ったのかを私に言って下さい。それでは、その点について話をした人々を誰が拍手喝采したのでしょうか。それでは、恐るべき隣国の人を誰が罵ったのでしょうか。それは何時も私ではありません。そして、それはあなたであることを私は良く知っています。拍手喝采したり評価が上がることは楽しいことでした。人々は同意させられました。そして今、私が望まなかった戦争に参戦しているのは私です。でも、私に同情することはありません。戦争を望んだのはあなたです。そしてあなたは今、あなたの不平で私を打ちのめしています。あなたは恐らく、戦争は歌になると思ったのです。ねえ、メッツへの道はあの高い処にあります。メッツへ行って下さい。さあ今です」。私は要約して言っています。でも、その声と言葉は、優雅で生き生きとした雄弁家ではなかったデモステネス（1）を大変良く思い出させました。私はその度に勝ちましたし、別の時にも何度も勝ちました。私は材木を手に入れて、どんな時でも肩の上には幹の跡がありました。私は待ちながらも、もう一度私の言葉を全て温めました。私が言った範囲では非難が無くもなかったのです。何故なら、結局のところ私は拍手喝采しなかったからですが、口笛で野次することもなかったからでした。私はバレス（2）好みの喜劇俳優を全てその儘判断して軽蔑したのでしょうか。そして、私の修辞学は農民や労働者たちを十分に救済したのでしょうか。同様にアカデミー会員と政治家とジャーナリストたちが大変静かに臆病になって罰せられずにいるのを、私は予想し得たのでしょうか。私は認めますが、戦場は私の言葉にとっては自由でした。結局のところ後になって戦争の真実が見えて来ました。それは私たちの上を通過して行ったコウノトリの飛行と同様に、明らかであり必然的なことでした。

私はここで言葉を続けて、もう一度他の言葉で纏めますが、私が衝撃を与える決まり文句は先ず反論出来ない様に思えますから、従って何時も簡単には通過しませんでした。情熱に溢れた或るモラリストはプロヴァンス地方まで逃げ出します。或る熱狂的なジャーナリストは少なくともトゥールまで行きます。首相はボルドーに身を隠します。彼らはそこから、若者や頑健な者たちが善を見出すために配置されることが正しいとします。一人は殆ど自分の足に満足していません。もう一人は行進するには重過ぎます。三人目の人は年齢外です。しかし、それらは説得力の無い理由です。パリは包囲されるか、襲撃されるか、占領されると想定されていて、砲弾そのものを別にしても危険でした。人質の役割は笑い事ではありません。それでも私には占領された国の老人の話があります。老人は、もしも必要であったならば銃殺されるという予想と共に二四時間、一日中監獄で過ごしましたが、今度は彼の番だと毎週予想しているのです。最も尊敬すべき者がまさしく人質に選ばれており、そこには健康も力も求めないが、戦うための一つの方法があります。私はつけ加えて言いますが、もしも敵の面前で人質であつてもなくても、どんな市民でも自分の部下を殺したなら、これは常にあり得ることですが、それは国が実際に克服出来ない

ものになっているのを知られる時です。私が話していた友人は、皇帝自身を殺し得る状況に一度か二度陥りました。彼は少なくともそのことを考えませんでした。市民は、例え彼の息子が軍隊にいても、戦争は一つの職業と考えて、まさしく傭兵の時代と見做します。これらの考えは、歩兵のイソップの頭においては混乱した夢想でしかありません。もしもこれらの考えが形を成して市民の道徳になったとしても、私は平和が絶対的であると言いません。何故なら父親が自分自身の言葉で単に強制されると、忽ち息子よりも勇気が無くなると考えるのは正しくないからです。勿論、戦争にも少なくとも一つの良識があるでしょうし、時々父親が息子の前で死ぬでしょう。それが順番であるからです。

この話に至るために私が樵の話を書かなかったのも、あなたは私を疑っているかも知れません。十分にあり得ることです。私が兵隊としての考えを包み隠すことには何の正しさもありません。私は、尊敬のしるしによる穏やかなプロポから、最大の自由を軍隊に見出しました。精神を空にするのは一瞬だけですし、プロポを書くことは自然な反応として継続して続けられました。戦争は目の前にあって急を要するものですが、それでも精神は屢々湧き出しました。私は、観念を順番に置いて行く新しい方法を知りました。ヴィルトールという名前だったと思いますが、不器用で鈍い人物である下士官が、私たちの上方の瓦屋根の下でランブクルの敵の一五五砲兵中隊の方を監視していて、脱走話を聞きました。その結果、単に脱走することは難しいが、良く行われていたということになりました。その点について彼は大変静かに言いました、「私は加わっているの、この戦争から逃れない。しかし、次の戦争の時には連中は私に勝てないだろう」。この様に話していたこの男は、少し前方の窪地に隠れていた第七砲兵中隊を爆発音で覆った恐ろしい敵の一三〇砲兵中隊の発砲の隙を窺いながら、瓦屋根の下に一度だけですが止まっていたのと同じ人物でした。大砲から煙が出てから着弾するまでの間が十五秒かかっていたので、彼はその度に電話で知らせていました。「避難せよ」。十五秒間に多くのことが行われます。しかし、少し長い一撃が瓦を飛ばしたことがあっても、敵の砲撃に関しては驚く程に規則正しく行われることを私は何度も見ていましたので、彼も信頼して止まっていました。ゴンティエも又、神秘的な軍人でも何でもありませんでした。一五〇砲兵中隊に、眼には眼で砲火に応戦する前には同じことを行いました。以上の様な事例から私はクロードに発見したこの言葉を少しは理解しました。「義務とは、少しも疑いの無いものに基づいた数々の身近なものである」。この様な言葉になっていないとしても、十分に意味があります。そして、その人間の更にもっと近くで、勇気を必要とすることや更に手に入れることを私は疑いました。それは〈祖国〉に対して言われる曖昧な義務ではありません。それは全ての目的に役立つものですが、一つの役割に結び付いた一定の義務であり、直ちに効果的に援助することが重要である危険な状態にある仲間たちに対しての義務なのです。それは、自己に対して大変に緻密な義務で美しい羞恥心によって大変に深く隠された義務を除いて、困難な中へ進んで行きそして恥ずべき恐怖に逆らう処まで試みるのをその者に強く命令するものなのです。動けない負傷者たちの傍らには看護人たちが大変立派に止まっていますが、何人も殺されたので明らかに危険であったと私は言われました。私がそれを全て信じたのは当然で、それを信じることに何の苦勞もありませんでした。もしも恐怖が蝕み始めたなら用心深い動きは大変に自然で、賢明でさえありますが、軽蔑すべきものになることにも私は気付きました。意味合いは微妙なのですが、それは諸行動によって見抜かれるものです。私はここで人が語ってくれたギヌメールのことを書かねばなりません。ギヌメールは負傷して治療期間

を送った後に、戦闘機による戦いに戻りました。彼は習慣としていた様に、最初に攻撃しないで空中で機銃掃射される儘でいました。下の方から見ていてびっくりしていた人々に彼は答えて言いました、「私は負傷した後に、大変な臆病者になっているかどうか見たかったのだ」。あのプルタルコス（3）の行いは伝説的になっていて、伝説の様に嘘でもあり真実でもあります。一つの観念に似ている彼は、私たちの混乱した動きを明らかにしています。その様な感情によって英雄は立ち直ります。しかし彼には、自分よりも賢明であったりそれ程までに有名であったりして、全てに足りる者たちに従うに違いない者の眼から見て、権力者たちの教訓を望む様なことは全くありません。私は屢々混乱しますが、常に自由な議論の中でやっとなこと生まれた話を形あるものにしているのです。（完）

（1）デモステネス（前三八四～前三二二）は、古代アテナイの政治家・雄弁家でマケドニア軍により失脚し自殺した。

（2）モーリス・バレス（一八六二～一九二三）は、作家・政治家で自我の探求から出発して国家主義へ向かった。

（3）プルタルコス（五〇頃～一二五頃）はプルタークのことであり、古代ローマ帝政期のギリシア系歴史家・伝記作家で、「対比列伝」（英雄伝）の作者である。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んで無能なジレタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノP S T A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ 9 7 1・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤忠詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

樗自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつばら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はら しげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

韓 喜徳（はん きとく）

一九四三年、千葉県鴨川で生まれる。

明治大学・政治経済学部卒業。

現在、松戸市在住の自由人。

「心のアルバム」・「赤い月」などのアンソロジー詩集に参加。

時調の会・千葉県詩人クラブ会員。

三浦 逸雄（みうら かつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかき

ねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

アラン『大戦の思い出』（四）：自由は失われ、不条理な戦争。誰を信じて、何が信じられるか。死や苦痛、命を落とすに違いない恐怖、これら困難な地獄の集まりの中にいる日々が迫ってきました。

酔狂洋酒談義（一）：乾杯にビールはおいしですね。お酒はあまり飲まない生活をしているので、ビール、ウイスキー、ワイン、その他の洋酒談義を、珍しく楽しく拝読しました。

三浦逸雄の世界（二十二） 軀を洗う男： 軀を洗う清々しさを感じました。

共和国の始まり： 絶対的権力者のいない、専制政治でもない、今の日本で幸いです。難解な風景は否定しなければならないでしょうけれど。

丸岡城： しゃくだに石の屋根瓦は重いでしょうね。城の姿や移り変わる歴史、一番短い手紙などを教えていただきました。

日傘： 毎年買っては失くしてしまう日傘。三連のうきうきした姿が見えるようです。

友よサヨナラ： ヘビとぺつとのように仲良くなれるのですね。猫にやられて悲しかったでしょう。私はサラリーマンのように嫌いですが、ヘビのことを知らなすぎました。もっと愛されてもいい生き物だったことを。

モナリザ： モナリザから想像もできない画が描かれています。バスキアを知りませんでした。調べてみて画の想像がつかしました。才能がありながら薬物におぼれ、若くして亡くなったと知り残念に思いました。

詩人（方言詩）： 方言の会話はやわらかくて味があるものですね。面白い詩人ですね～。

季節のスケッチ： しかけ屋のお婆さんや人懐っこい犬はどうしたのでしょうか。しかけ屋のお爺さんとの会話や様子、若い釣り師、我慢強く釣り糸を垂れている人影などが、絵を見ているようでした。古いシルクハットがよかったです。

空腹感： よく写し出される情景が迫ってきます。イベント会場での空腹感が丁寧に描かれていて、最終連の思い高まって共感しました。

（以上）

同人誌 風 狂 (ふうきょう)

第39号 (2017年10月登録)

<http://p.booklog.jp/book/117679>

編 集 : 風狂の会 (担 当 : 高村 昌憲)

編集担当者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117679>

電子書籍プラットフォーム : パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社トゥ・ディファクト